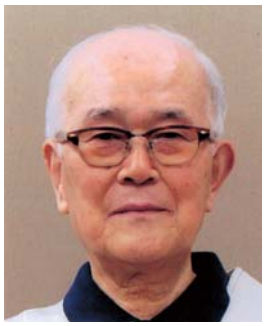

講評

審査委員長　髙石　幸平（愛媛県俳句協会会長）

第十二回のえひめスポーツ俳句大賞を選ぶに当り、私ども審査委員は、愛媛県俳句協会役員としての立場から、まずは俳句としての文芸性に重点を置き、選考審査を致しました。この方針は、第九回からはっきりと定め、今回は四年目になります。

スポーツ俳句とは申しながら、俳句は俳句です。まずは俳句としての価値が問われます。これを審査委員全員一致の基準として参ったところであります。

審査結果を申し上げる前に、この大賞につきまして、愛媛県体育協会の皆々様、俳句作家として応募して下さった皆々様、それぞれのご尽力に、心から敬意を表します。

さて、此度の「えひめスポーツ俳句大賞」一般の部は「天高し意地で突っ込むハイパント」（埼玉県・糠谷憲宏さん）が選ばれました。これはラグビーを詠まれたものでありますが、俳句としてのかたち、スポーツとしてリズム感が、見事に融合しております。

ジュニアの部では、俳句大賞に「ぎゅっと持つバトンの色は秋の色」（愛媛県・今井歌乃子さん）が選ばれました。競技種目としては「その他の部」の作品です。感覚が光っております。

一方、ハイブリッド部門の大賞には「陸上競技・天高く驚異の粘りバーを越え」（愛媛県・鳴滝久照さん）が推されました。走高跳の写真と俳句。どちらも立派なものでありました。此の部門は、写真と俳句がそれぞれに立派であること、お互いに説明し合わないことが大切であります。

愛媛県では、平成二十九年（二〇一七）に国民体育大会が開催されます。「えひめ国体」の開催です。

その時、どんな俳句を拝見することが出来ますかどうか、実に楽しみであります。若い人に負けずに一句投じたい気分であります。